安田女子大学紀要　45，75-90　2017.

異文化コミュニケーション教育（異文化教育）の原点としての「我々」と「彼等」のコミュニケーション問題(19)

―異文化教育における「他者の苦痛」―

青　木　順　子

‘Suffering of Others’ in Intercultural Communication Education

Junko Aoki

要　　旨

「他者の苦痛」の表象は，強い共感を誘い，感情を劇的に変化させる一方，一過性のことも多い。また，人々は残忍な行為を記録する写真や映像に対しての「見る義務」は感じることができるかもしれないが，見ることの意味や示唆することを理解する能力において，常に「理性や良心」のもとにあるわけではない。恐怖を与えるものから遠ざかりたい気持ちも起きる。それゆえに，「他者の苦痛」の表象の背後にある構造的暴力による苦悩をまず正しく理解しようとすることが必要とされる。力の構造に気づき，自分が本当に何が出来るのかを問う力までにいたるためには，正しい知識を土台に，遠い「他者の苦痛」に近づき，知り，理解し，語ろうとする気持ちになる必要がある。その過程で内的にいだくようになるような真理を，多様な真理を持っている他者と語り合い・関わる過程を経て，ともに生きる世界を人間的なものに変えようとする段階に繋げていく可能性がはじめて存在するのである。

キーワード：異文化コミュニケーション教育，異文化コミュニケーション，異文化教育，他者の苦痛

はじめに

異文化コミュニケーション教育における「幸福」の扱いを考える中で，前稿[注1]では，ジェノサイドをテーマにして論じた。個々の人間が，ジェノサイドという犯罪について知り，その犯罪行為における人間の尊厳への冒涜について理解した上で，正しい知識を持った人々が，その後どれだけ共感を持った生き方をしていけるのかを妥協せずに問うこと，これがまず異文化コミュニケーション教育が取り組むことができる課題である。本稿では，そうした「自分に出来るコミットメント」を考えることを可能にするような，異文化教育のあるべき形について考察を続けたいと考えている。

1.「他者の苦痛」と「我々」を劇的に変化させる「モノ」

2015年,「我々」を劇的に変化させたと世界中に報道された「他者の苦痛」を示す一枚の写真があった。多数の難民を乗せた欧州へ向かうボートがエーゲ海に沈んだというニュースが一度ならず繰り返し報道されている中の９月３日，欧州各紙で一面に掲載され，たちまち世界中に知れ渡ることになるのが，ボートの沈没によって溺れてトルコの海岸に漂着したシリアからの難民，３歳の男の子，アイラン君の遺体の写真である。この写真は，一体何にどのような変化をもたらしたのだろうか。

2015年は，シリア情勢の悪化により，欧州に向かう難民数が急速に増加し，難民問題が今まで以上に世界的な規模でクローズアップされることになった年である。急激な難民数の増加は，元々難民政策において各国の事情も異なる欧州にとって，他国との協調を難しくさせる不協和の理由となり，比較的難民受け入れに寛容な政策を取ってきた国においても，自国の状況悪化を懸念する人々が増えることで国内の世論の高まりに対処を迫られる政治問題となっていった。この写真が掲載されたのは，まさに，そんな矢先のことだった。母親と５歳の兄も亡くなったという，その幼子の写真は，欧州全体に大きな衝撃を与え，難民受け入れをめぐる議論に大きな変化をもたらしたのだった。例えば，それまで難民の受け入れには否定的であった英国のキャメロン首相は,「一人の父親として深く心が動かされました」として，難民の受け入れ拡大を表明するにいたったのだった[注2]。

「八百人の難民が乗ったボートが沈没」というニュースより，砂浜に打ち上げられたアイラン君の写真がはるかに大きい衝撃と影響を世界に与えたことになる。ナショナルジオグラフィックは,「歴史を変えた，心揺さぶる子ども達の写真」というタイトルの記事において，こうした写真が人々に与える影響について，以下のように記している。

> 子どもが写った写真は，見る者に我が子や自らの子ども時代を思い起こさせる。苦難にあえいだり亡くなったりした子どもたちの写真と向き合うとき，私たちは他人事ではない悲しみに心を震わせる。この感覚が心に変化を起こす。実感しにくいニュースがくどくどと報じられている遠い国の問題に，突如として関心が生まれる。写真が世界の人の目に触れれば，心を動かされる人数も桁違いになる。心を揺さぶられた人々は写真について語り合う。心の変化は考え方を変え，さらには政策，そして歴史を変えることもある。[注3]

しかし，こうした難民受け入れに寛容になろうとする気運を一気に鎮めるような事件がほどなく起こることになる。2015年11月13日に発生したパリ同時多発テロ事件である。その襲撃犯の中に難民申請をしていた人物が含まれることも発表され，一気に難民対策とテロ対策が結び付けられるようになる。元々は自国が財政的に受け入れ可能か否かが難民受け入れにおいて一番の焦点になっていたのが，難民を装って入国するテロリストという図式から，テロの脅威は難民問題において考えられるべきこととして強調されることになったわけである。悲惨なテロ事件は，一夜にして，寛容であろうとした「我々」の立場を変えて,「彼等」に厳しい態度を取るまでに人々の態度を変容させ得るという，歴史的に幾度となく証明されてきたことを再認識するような事件となる。元々，反移民を唱え，イスラム教やイスラム教徒に偏見を持つ人々がさらに声をあげ，排外主義も，前より公然と主張されるようになるのである[注4]。

この事件の直後，またもや写真に関わる，議論を呼んだ出来事が報道される。フェースブック

が一時的にユーザーのプロフィール写真に，フランス国旗のトリコロールカラーを重ねられるようにしたというものである。CEOのザッカーバーグ自らがプロフィール写真にこのトリコロールを重ねて示した行為に，中東やアフガニスタンでも同じようなテロ活動の犠牲者が毎日のように生まれているのに，フェースブックがこの事件だけを特定し，トリコロールカラーに彩られた写真を通して，人々の団結を示すことを可能にするのは，他の場所での死者とパリでの死者に差があるとすることと同じだという批判も出る(注5)。トリコロールカラーを重ねたプロフィール写真にこだわらずにはいられない，見放されたように感じるしかない「彼等の苦痛」の状況がそこに存在している。そして，アイラン君の写真の与えた多大な影響に見るように，写真ごときにこだわるなとは誰もいえないのである。写真が与えるイメージは強力なのである。

こうして，アイラン君の痛ましい遺体の写真が喚起したはずの難民の困難を理解しようとする動きは急速に鎮まり，パリ同時多発テロは，それと同等かそれ以上とも思われる激しさで難民への無理解と不寛容の世論を産み出した。そして，年が明けた2016年も，引き続き欧州を目指す難民の苦難の状況を伝える報道と並行して，その欧州での以前よりも頻発する排外的行動についての報道が続いたのだった。難民が「我々」の厄介な問題と感じられて，偏見の行為を引き起こさせる時，ジェノサイド時の行為を彷彿するような行為が示される―デンマークで決定された移民の金品没収，英国であった移民のリストバンド着用，そして難民申請中の人々が住むアパートだけを特定する赤く塗られた戸(注6)。

「我々」は「彼等」を援助する中で，便宜上こうした施策を決定しているのであって，ジェノサイドの時の行為と比較されるのは心外であるという意見もあろう。しかし，少なくともそれらの行為がジェノサイド時の行為を自然と彷彿させることは怖いことなのである。そして，こうした偏見の行為は，過去の歴史では，例外なく他者への暴力行為の容認にエスカレートしていくのである。「ドイツの難民施設に手榴弾投げ込まれる，極右の犯行」，「スウェーデン“極右”覆面集団が子どもの難民を襲撃」という報道がネット上に上がってくる(注7)。「極右」と分類される，わずかな，ごく一部の人の行動だけがそこに示されているのではない。「極右」にこうした行為の実施を容易くさせる社会の雰囲気がそこに存在していることを意味するのである。その間にも，「子どもを含む難民の死」は相変わらず報道されている。しかし，「難民ら乗せた船転覆，子ども５人含む39人死亡　トルコ　」(注8)と写真とともに報道されても，あの一枚の写真が生んだような衝撃を生み出すことはなく，報道されては人々の記憶から消えていくのである。

こうした他者の苦痛を示す写真の与えるインパクトそのものについて，ソンダク(注9)が，よく一般的に普及している二つの考えをあげている。一つは写真のような映像メディアで取り上げられるものによって，人々は「現実」を理解し，それに操作される。二つ目は，映像にあふれかえり，その刺激に慣れてしまって，本当に重要とすべき映像のインパクトが弱まり，映像に対して引き起こされる感情は淡泊になる。つまり人々は冷淡になる。2015年の「難民問題」をめぐる写真の報道は，これをもう一度私達に認識させたことになる。

2.　他者の苦痛

前節で挙げたソンダクは，他者の苦痛を示す写真とそれを眺める者達の感情との関係についての説明において，私達が敏感でいるべき事柄について挙げている。主要な点をいくつか挙げてみたい。一つには，見る側が他者の苦痛を映しだす写真を見て自然に感じる「義務感」は，必ずし

も最善の良心の管轄にあるわけではないことである。

人々は残忍な行為を記録する写真に対して「見る義務」は感じることができるが，それを見ることの意味やそれが示唆することを理解する能力においても，常に「理性や良心」の元にあるわけではない[注10]。前節に挙げたアイラン君の写真のような「現実」を理解させる写真でさえ，難民を襲撃する，子どもの難民を襲撃する，といった人々には，「懲りずに欧州に移動してくる厄介者」と難民達が映っているのかもしれない事実を忘れてはいけないのである。

また，普通の人間には，恐怖を与える写真や映像の類から遠ざかりたい気持ちが起こることもソンダクは指摘する。人間は普通であるほど，往々にして，恐怖の映像に対して，かえって遠ざかりたくなることがある。引き起こされる感情をどう消化するのか途方に暮れ，「『われわれ』にできることは何もない」と無力に感じ，そして「この『われわれ』とは誰なのか？」，「また『彼ら』にできることも何もない」，でもその「『彼ら』とは誰か？」と次々に答えが簡単に導けないまま考えてしまい，人々は圧倒されて，むしろ何も感じなくなる[注11]。

さらに，現代社会においては，写真に接する機会は多くあり，距離のある，遠い場にいる他者の苦痛を眺める機会を与えられても，その機会はいくつもの「異なる方法」で活用されるという事実がある[注12]。例えば，残虐行為の写真は，見る者に平和を希求させるかもしれず，一方，それとは全く対立する感情，報復への呼びかけとなることもあるように，である。だからこそ，彼女は，往々にしてそうした写真が喚起する同情や嫌悪感に自分の関心をそらしてしまい，「どのような写真が，誰の残虐行為が，誰の死が，示されていないのか」を真摯に問うのを止めさせてはいけないのだと警告を発している[注13]。

実際，大学の授業で学生達と何らかの「他者の苦痛」を示す写真を共有すると，直後に，酷さに苦しくなった，悲しくなった，無力感を感じて嫌な気持ちになった，衝撃を与えるような写真は見たくなかった，と使用について不満の気持ちをコメントする学生が必ずいることに気付く。それが，全授業15回のうちのたった一回での，たった一枚の他者の苦痛を示すような報道写真でもある。例えば，ある授業におけるその一枚は，スーダンでの酷い内乱状態の最中，難民キャンプにやっとたどり着いた兄弟の写真である。２歳ぐらいの幼い弟を抱きかかえて，10歳ぐらいに見える兄が優しく微笑みかけている。弟は片手を差し伸べて，兄の頬に手をあてている。兄弟の情愛に満ちた光景。しかし，二人の極度に痩せこけた姿が，明らかに「他者の苦痛」を示す。何もできない「我々」を悲しくさせ，むしろ，それだけ酷い状態を「眺めるだけ」ということに罪悪感を覚えさせる行為であること，そして事実を受け入れがたくて混乱してしまうこと―これらが学生からこうしたコメントが出る理由なのであろうし，理解もできる。

しかし，なぜ教育の場でそうした写真を使うのかについて説明を問われるのであれば，以下のように答えることになる。見ても変わらないのに，眺めるだけになるのだから，かえって苦しく，悲しくなる，罪悪感を覚えるという声には，まず，その通りでしょうと頷く。でも，一方で，その理由をそのまま受け入れたら，「我々」には遠くの他者の苦痛の現実を知る機会そのものがなくなると反論したい。引き続き，ソンタグの言葉を借りよう。「映像は，距離を置いた地点から苦しみを眺める方法であるという理由で非難を受けてきた。まるでそれ以外に眺める方法があるかのように。しかし近距離で，映像の介入なしに苦しみを眺めることも，眺めるという点では同じである。[注14]」だから，「眺める」ことは「眺めない」ことより，機会を与えるということである。「我々」が絶対に経験しない，「遠く離れた他者の苦痛」をそこまで「現実」に感じるものとして眺める方法は，おそらく「他にない」のであるから，これがおそらく唯一の機会に

なるかもしれない。こんなインパクトのある形で知りたくなかったし，写真の中の人々の酷い境遇に混乱してしまうという声にも，当然そう感じてしまうよねとまず応答したい。他者の苦痛，いわば「地獄」を眺めるわけである。どうしてこんなことが在り得るのだろうと，人間不信になるから理解さえしたくないような思いにかられるかもしれない。それゆえに，驚き，混乱し，不愉快にさえなる。

しかし，ソンタグが書いているように，「これは地獄だと言うことは，もちろん，人々をその地獄から救い出し，地獄の劫火を和らげる方法を示すことではない。それでもなお，われわれが他の人々とともに住むこの世界に，人間の悪がどれほどの苦しみを引き起こしているかを意識し，その意識を拡大させられることは，それ自体よいことである。悪の存在に絶えず驚き，人間が他の人間にたいして陰惨な残虐行為をどこまで犯しかねないかという証拠を前にするたびに，幻滅を感じる（あるいは信じようとしない）人間は，道徳的・心理的に成人とは言えない。(注15)」のである。「これは地獄だ」と認める時，私達は少なくとも，その地獄が同じ世界に存在することは理解するのである。同じ人間がそれを生み出していることも，である。人間性への幻滅をしないために，そうした理解を避けることは，理想として持つべき人間性への希求の過程において真摯さに欠ける人間，つまり未成熟な人間ということになるのである。

ソンタグは，さらに「我々」が「本当に理解し得る」のかという問いに，否，「本当には理解し得ない」と答える。「『われわれ』―この『われわれ』とはこの死者たちの体験のようなものを何も体験したことのないすべての人間である―は理解しない。われわれは知らない。われわれはその体験がどのようなものであったか，本当には想像することができない。戦争がいかに恐ろしいか，どれほどの地獄であるか，その地獄がいかに平常となるか，想像できない。あなたたちには理解できない。あなたたちには想像できない。戦火のなかに身を置き，身近にいた人々を倒した死を幸運にも逃れた人々，そのような兵士，ジャーナリスト，救援活動家，個人の目撃者は断固としてそう感じる。そのとおりだと，言わねばならない。(注16)」結局，「本当に理解し得る」ことはできないほどのことが起きているからこそ，逆説的ではあるが，ジャーナリストは，その地獄の場へ行って，写真を撮り，「我々」に報道すると言えるのである。それしか「眺める」ことができない「我々」に他者が被っている地獄を眺める唯一となるかもしれない機会を与えるという使命のために，である。完全には「理解しない」，「理解できない」，「想像できない」「我々」のために。けれども，その「我々」に「眺める」機会を与えることは，与えないより，はるかにましなことだけは確かなのである。

3. ジェノサイド・「彼等の苦痛」の表象と理解

彼等の苦痛を経験しない者には本当には理解ができないという可能性の大きさにおいて，ジェノサイドの右にでるものはないだろう。本来生存できるはずの人間が，同じ人間によって，組織的に，暴力的に，人間の尊厳と生存の権利を奪われていくという不条理そのものの行為なのである。私達は，そのジェノサイドでの「他者の苦痛」を実際は何をもって分かったと感じるのだろうか。考えられるものには，小説，映画，写真，絵画，報道ニュースといったメディアと，史跡や博物館という場がある。ここでは，本稿で取り上げてきた，現実を一瞬にして見せるという点で大きな力を持ち得る写真というメディアを取り上げて考えてみよう。

ジェノサイドの有名な写真と言われると，たいていの人は，いつか見たことがあると何枚かの

有名な写真がすぐ浮かぶはずである。悲惨な苦痛の写真を残さずにいられない出来事でもある。ゲットーから追い立てられる人々の写真，積み重なる死体，収容所から解放された人々の亡霊とまごうかのような痩せ衰えた肢体―すべて「他者の苦痛」を示す，極めて残虐な写真であり，私たちが，こうした出来事を引き起こす人間であり，そして今も世界のどこかで起きている戦慄するような出来事を認識するのに，一枚でも十分という気がする写真である。

しかし，今まで述べてきたように，写真には衝撃を与える力があり，同時に，いくつもの問題を同時に孕むものなのである。百枚の写真を見て，百倍の理解が生まれるわけではない。それどころか，我々は無力に感じて，完全に理解するのを止めるかもしれないのだ。実際，ホロコーストを特集した写真集は一回見ただけで，私の本棚で埃をかぶっている。二度目を見るのは辛すぎるのだ。しかし，ジェノサイドでの「他者の苦痛」を示す写真は，決して，上記の写真集にあるような写真だけではない。そして，それが写真というメディアの現実を見せることにおける可能性であろう。

写真の力について考察するために，ある漫画作品を挙げてみたい。ジェノサイドにおける「彼等の苦痛」を描いてきた様々なメディアの中で，漫画は後進といってよいが，イメージを自由に視覚化して物語を創造できるという点では，漫画はより感情に訴えるメディアとなり得る。その漫画を使ってジェノサイドを描き，他のメディアに出来ないことを為し得たと世界で大きな反響を得たものに，1986年発刊の『マウス　アウシュビッツを生きのびた父親の物語』(注17) がある。アウシュヴィッツを生き延びた自分の父親，ポーランド系ユダヤ人のヴラデックの人生を，作者のアート・スピーゲルマンが体験を聞き出しては描いていくという形式で描かれている。1944年，アウシュヴィッツに送られ生還した父親は，同じく収容所から生還した母親アンジェと再会し，アメリカに渡ってくる。アンジェは，戦争中に，多くの家族や友人，そして最初の子どもを失った体験から，戦後，PSTDを患い，20年以上経って自殺をしてしまう。スピーゲルマンは，年老いた父親と会話しながら，自分が知らないナチス侵攻前のアンジェとのなれそめ，結婚，最初の子どもであるリシュウの誕生，ナチスに連行された後の収容所での壮絶な生，解放されて再会するまでを聞き出していく。その会話を交わす際の現在の父親や自分の様子や思いが，父親の過去を描く途中に挿入され，漫画は過去と現在が絶えず交錯する形式で進行する。ヴラデックの過去に何があったのか，そして，同じく生き延び，戦後，自殺をしたアンジェとは何があったのかについて知り，父親との会話を通して息子である作者自身が，「アウシュヴィッツそのもの」を理解していこうとする過程が読者に示されることになる。

この漫画では，すべての登場人物は，頭だけが動物で表象され，例えば，作者や父親，ユダヤ人はネズミで，ドイツ人はネコ，ポーランド人はブタ，フランス人はカエル，というように民族別に違う動物があてられている。1992年に続編の『マウスⅡ』が刊行され，スピーゲルマンはピューリッツー賞の特別賞を受賞している。ジェノサイドを生存した人間の物語を，漫画という形式で描き得ることを示したことについては，数々の絶賛の書評が示す通りである (注18)。原作の英語版に記されている一例は，「心をうち簡素な，静かな大勝利―漫画以外のどんなメディアにおいても，正確に記述することは不可能であり，達成することは不可能である。」（ワシントン・ポスト）である (注19)。ウンベルト・エーコが『マウス』に与えた賛辞は以下のようなものである。「文学の分野の規則をうち破り，新機軸を創りだし，なおかつ，人々の支持をかちとること。『マウス』は，このすべてを成しとげた。(注20)」明らかに，この漫画『マウス』は，ジェノサイドを描き得た最高の作品の一つとしての評価を得ているのである。

興味深いことは，『マウス』において，作者は３枚だけ写真を使用していることである。一枚目は，一巻目内で別タイトルをつけて数頁ほど挿入してある母親の自殺時のことを描いている漫画の中に挿入された「1958年，母親アンジェと幼い作者が並んで立っている写真」(注21) である。二枚目は２巻目の物語の始まる前の献辞にある「幼いリシュウの記念写真」(注22)。リシュウは二人の最初の子どもで，ナチスによる連行前に預かっていた叔母が自殺をする時に不憫に思って自分の子ども達と共に毒殺した。三枚目は，この漫画の２巻目，最後から３頁目に使われる (注23)。終戦後，生き残ったアンジェは，ヴラデックの消息も分からずひとりぼっちである。そこにドイツから手紙が届く。「あの人，ドイツにいるわ……チフスだったの！ジプシーが言ったとおりだわ」「彼の写真がはいっているわ！まあ。ヴラデックが本当に生きている！」―そこまで語った父親は作者に「ある写真屋を見つけたんだ。そこには，記念写真用に新品で清潔な収容所の制服があった」と説明する (注24)。そして，そこに，漫画の１・２巻を通じて初めて，物語の主人公ともいえる父親の写真が出てくる。一人の若い男性の写真。収容所を出て妻に送るために撮影したその写真は，確かに新品に見える収容所の制服で，姿勢をただし，カメラにおさまっている。物語はもうあとわずか２頁しかない。ネズミで描かれた母親と父親の再会と抱擁。「これ以上は話す必要はないだろう　わしらはふたりとも，とても幸せで　それからずっと幸せに幸せにくらした。」と父親が言い，録音のテープを止めるように頼み，「しゃべり疲れたよ。リシュウ，もうお話は終わりだよ……」と眠ろうとする (注25)。そして直後，現在の二人の並んで眠る墓の絵で物語は終わる。この写真の中の若者ヴラデックは，「我々」には想像をすることも難しいような極限の苦痛を生き延び，その過酷な体験の後まだわずかな月日が経っているだけなのに，これからは人間らしく生きられるという希望さえすでに目に宿しているのだ。それだけに，アンジェはPSTDで戦後20年以上を経て自殺をしてしまい，ヴラデックの方もアウシュヴィッツの経験のために多くの奇妙な日常生活での神経質な拘りを捨てられず戦後生きているという，完全に克服するのは難しかった「ジェノサイドのその後」をすでに物語で読んで知っている読者である「我々」の胸を激しく打つ。本当に「幸せに幸せにくらした」わけでもなく，作者の名前の代わりに戦争中に亡くなった子の名前を錯乱して間違えて呼ぶ父親，漫画では「人間が本当は受けるべきではない」酷い苦痛を受けてきたネズミは，確かに，その最後の写真にあるように，人間であり，そして，我々の経験しない苦痛を経験した「彼等」であり，同時に「我々」なのだと気付くからである。読み終えてから，２巻を通して，この家族４人がちょうど一回ずつ写真に登場し，それらが恐怖を直接連想させるような写真ではなく，むしろ「比較的幸せな時」の写真，何回も家族が共に眺めるような普通の家族アルバムにあるような写真，であったことに気付く。アウシュヴィッツがなければ，人間の当然の権利として四人全員が共に人間らしく幸せに存在できていたはずなのに，同じ人間の行為によって組織的にそれを奪われた，そうした人間の現実の顔を私たちは見たのである。苦悩の様子をまるでオブラードに包むかのように動物の頭をした人間達の登場する漫画で表象した，そのファンタジー化した動物表象が，「他者の苦痛」を視覚化した漫画を読むという過程を少しは容易にしてくれたかもしれない。しかし，写真の人間は，その動物の仮面をその瞬間だけ脱ぎ捨てて，我々をただ見つめる。アウシュヴィッツの苦痛を生きることはなかったし，ないであろう「我々」と同じ人間がそこに存在するのが見える。それゆえに，彼等の被った苦痛はさらに強く心に響くのだ。「他者の苦痛」を示す写真とは，結局，そんな写真なのだろう。

同じことが映画でも言えよう。映画は，かつて活動写真と呼ばれたように，一つひとつの映像

のコマだけを取れば写真と同じ性質を併せ持つメディアでもあり，同時に，連続で物語を描けるために，人々に大きな影響を与えるメディアともなり得た。ここでは，映画の最後の映像シーンについて一例を示してみたい。ジェノサイドに関わる映像化において批判が出た映画に，『アンネの日記』の1959年のハリウッド版映画がある。アカデミー賞８部門でノミネート，３部門で受賞し，良質の映画であると考えられたにも関わらず，当時，画面一杯に映し出される空に「それでも，私は，人間はみな善であると信じている」とアンネの声が響くエンディングがジェノサイドの生存者に批判されたという(注26)。批判には，たとえエンターテイメントとしての性質を免れ得ない商業映画でも，ジェノサイドを描いて，このように「人間性への肯定」という楽観的なイメージで終えては駄目なのだという切実な思いが反映されている。このエンディングを許容できないと感じる，苦痛を本当に味わった人々の思いも理解できる一方で，それでも教育という立場では，こう言うこともできるのである。これが「彼等の苦痛」の不完全な断片だとしても，むしろ「我々」に見ることを可能にしているのが，実はこの最後のシーンかもしれないと。元々，エンディングは，霧の中，収容所の制服を着たアンネが体を揺らしている姿を映し出すものだったが，「あまりにもインパクトが強すぎる」という理由で変更され，実際，日記にも書かれたアンネの言葉を使った空の光景をエンディングにしたという(注27)。すでにエンディング直前の，ゲシュタポの急襲を知らせるサイレンが鳴り響き，隠れ家の戸を叩き割るまでの数分は誰が見ても息苦しいほどである。そうした見ることを避けたくなるほどのパニックを与えず，むしろ後でさらに理解しようとし始めるかもしれないという点では，この空のエンディングはよかったのかもしれないのである。実際は，『アンネの日記』では，アンネの言葉に続きがある。「混乱，悲惨，そして死からなる基礎の上に，自分の希望を積み上げることが出来ないのです。(注28)」この部分こそ，ジェノサイドの本質である人間の希望を築くことを容赦しない行為，を示すのであり，取り消された最初のエンディングである収容所のシーンと呼応もするのであろう。

しかし，ジェノサイドについての本質が十分理解されていると考えられる時は，よりよい目的のために許される脚色もあるのではないだろうか。アンネに許されたのは，無限に続くであろう美しい空を隠れ家の小窓から見ることだけという残酷，その空のもとにある広い世界についに出た時にはアンネには生きることが許されなかったという不条理，そして，残酷な状況にあってもアンネが本質は善なのだと信じようとしていた，その人間が過酷な運命を同じ人間に課すという愚弄―そうしたジェノサイドの本質である。あらたに『アンネの日記』はドイツで映画化され，2016年２月の66回ベルリン国際映画祭で上映され(注29)，また，同映画祭では，難民問題を描いたドキュメンタリー映画の「火の海」が金熊賞を受賞したという(注30)。ジェノサイドと難民問題を扱った二つの映画では，どのようなエンディングが創造されたのだろうか。人々に「他者の苦痛」をもたらすものの本質を理解させる，そして，理解したいと思わせるものであって欲しい。

5. 構造的暴力を理解させる

私の授業でたった一枚の「他者の苦痛」の写真しか出てこない理由は，すでに述べてきたような写真の性質にある。一枚の写真―ちょうどアイラン君の写真が引き起こし，800人の難民が乗ったボートが沈没したというニュースが引き起こせなかったような類の感情を引き起こすために，異文化コミュニケーション教育が衝撃的な苦痛を示す「写真」にだけ頼っては，報道写真と

同じ運命をたどることになる。これは，どのメディアの使用でも同じことが言える。前節で挙げた『マウス』で，本のメッセージについて尋ねる記者と作者スピーゲルマンとの間の会話が描かれている―「この本からどんなメッセージをくみとってほしいのか，視聴者に言ってください」「メッセージ？さあね。ぼくの本を何かのメッセージに格下げする気はまったくないんだ。つまり誰かに何かを説得する気なんてないんだ。ただぼくは……」(注31)。このあと引き続き，父親と同じくアウシュヴィッツの体験をしている自分の精神科医パヴェルとの会話で，アウシュヴィッツを描くことが一体可能なのだろうかと作者は疑念を吐露する―パヴェル医師「いまは君の本の話じゃないが，これまでホロコーストについてどれほど多くの本が書かれてきたことか。問題にすべきは何か？人々は，変わりはしなかった。もっと新しい大きなホロコーストが必要なのかもしれない。」，「とにかく死んだ犠牲者たちは，決して彼らの側の物語は話せない。だからもう，物語はこれ以上，ないほうがいいのかもしれない。」，スピーゲルマン「うーむ。サミュエル・ベケットがこう言っています。『あらゆる言葉は沈黙と無のうえについて不必要なしみにすぎない』「でも一方で，彼はそう言ったんです。」，パヴェル医師「彼の言うとおりだ。そのことを君の本に入れるといい。」(注32)。そして，スピーゲルマンは，描くことの不可能性を口にする。スピーゲルマン「ぼくの本？ぼくはアウシュヴィッツについてなんて描きたくも考えたくもないような気がしてるんだ。はっきり絵にできないし，どんな感じなのか想像することもできやしない。」，パヴェル医師「アウシュヴィッツの感じかい？フム……どう説明したらいいか。ワーッ！」，前のめりになって身を乗り出し，突然声をだし脅す，スピーゲルマン「キャー」，驚きで飛び上がった彼に，医師はこう言う，「ちょっとそんな感じかな。しかもずっとだよ。門を入った瞬間から最後の最後までね。」(注33)。衝撃的な写真のインパクトについて考えてしまう一瞬である。「ワーッ！」「キャー」―そうした一枚の写真が与えるような激しい動揺。しかし，それが「最初から最後まで続くというアウシュヴィッツ」を描くとするなら，それは簡単ではない。このアウシュヴィッツを描くという表象不可能性に苦しみながら，スピーゲルマンは２巻の漫画でともかく「丁寧に」描いたのである。父親から聞き出す過程で知った戦前の人間模様，迫害を受け始めたユダヤ人に向ける人々の感情，ユダヤ人間の関係，ユダヤ協会のしたこと，信頼と裏切り，恐怖の収容所で機能していた組織，権力を持つ者と持たない者の間のやり取り，生き残れる者と生き残れなかった者の会話，解放後の死，命令と服従，飢えと渇望，不服従と諦め，残酷さと驚愕，希望と絶望，時には驚くほど細かく丁寧に描かれる詳細，そして現在の父親と自分の会話，父の神経症的行為，それら全てがそろって，アウシュヴィッツとは何であったのかを，おそらく「可能な限り」説明しようとしているのである。その努力が無駄でなかったことは，この本に対して与えられた多くの反響が示すとおりである。だからこそ，作者が考え抜いて入れたはずの３枚の写真は幸せな時の家族の写真の，あの３枚だけで十分でもあり，また適切でもあったのだ。

『マウス』で作者がしたのと同じような努力が，授業でのたった一枚の写真の使用過程においても必要である。授業が正しい知識を教え理解をさせようとする過程において，ちょうど『マウス』で扱われたような努力と配慮がなされた時にだけ，写真も使用される意義を持つのである。アイラン君の写真の衝撃が容易く衰えたフランス同時多発テロ後が示すように，「我々」の危機は「彼等」の危機とは比較できないほどの重大性を持ち，その認識が強まれば，２項対立で危機の理由の一つとされてしまう「彼等」は，同情や共感をする段階から，一挙に，簡単に攻撃さえし得る相手となり得るのである。ジェノサイドは，そうした過程の後で存在してきたのである。だからこそ，社会に存在する構造的暴力そのものについて，教育では何よりもまずきちんと説明

をしなければならない。

１，２節で挙げたソンタグがアブグレイブからの写真について「わたしたちの写真」と言ったために批判を受けたことについて，バトラーが彼女の著書で以下のように説明している。ソンタグの言わんとしたことは，その写真を眺める時，わたしたちは「自分たちが見るところを見ている」，そして，「枠組みを作っている規範を共有しているという点で，わたしたちはあれらの写真である」という意味なのである[注34]。バトラーは，それに続けて，「わたしたちが見るものを見えることができないようにする枠組み」を考えること自体が重要なのだという[注35]。前述した写真の与えた衝撃からそれまでの政策変更を表明する欧州の政治家達の発言と並んで，今までの難民対策の過程を示唆して厳しく非難の声をあげる発言があった。トルコのエルドアン大統領は，「欧州各国はすべて難民を死に追いやった罪を背負っている」として欧州を非難し，「地中海で溺れているのは難民だけではない。我々の人間性もだ」と述べたのである[注36]。「我々」と欧州各国に示唆したことが，まさにこれになるだろう。シリア人難民を見ている「我々」の人間性は，その写真に必然的に見え得るのだ。そして，「我々」が，遠い他者である「彼等の苦痛」にそれを見るためには，「正しく知る」必要がある。

実際には，構造的暴力による苦悩を説明することは容易ではない。それについて，ファーマーは以下の３つの理由をあげている[注37]。一つ目は，「我々」は「自分達と同じような生活を送る人々の苦しみには共感できる」一方で，「地理的・人種的・文化的に隔たりがある人々の苦しみ」は，簡単には理解できない。二つ目は，「苦しみの重さを表現する方法」は簡単には見つからないことである。事実の単純な記載や数値は事態を客観的に提示するだけで，大勢のそこに存在する苦しみは伝え得るわけではない。三つ目に，「苦しみの力学とその構造」自体が，十分に説明できるほどに理解されておらず，大きな枠組みで捉えなおす必要がある。これらの理由を挙げた上で，ファーマーは，結局，「極度の苦しみを理解すること」と「説明すること」はまったく異なることになると言う。ファーマーは，構造的暴力の本質を理解させ，その行為によって，人々に苦痛をもたらす経緯をたどり，「グローバルな視点で苦しみを理解し説明し予測することを可能にする分析モデル」を「我々」が考え出すことはできないものかと問いかけている[注38]。

さらに，ファーマーは，構造的暴力を文化的相違として理解しようとし，文化の現象に存在する「力の格差」を存在しないかのように見なす学問の貧困さを指摘する[注39]。異文化コミュニケーション教育が学問としてだけ存在しようとする時は，その存在そのものの意義がなくなる時でもある。「彼等」の苦悩をもたらす構造的暴力を実際に丁寧に説明し続けること，それをもって学生に喚起できる「彼ら」への共感を自らの行動に導く力に向かえるように努力すること―それを伴わない異文化教育は意味がないのである。

報道ニュースで「難民」について聞く日が続いた2016年，授業で，学生達に「難民問題」について何が出来ると思うかを何回か聞いてみた。その返答において，「私達は」と言う彼女達の意味する「私達」は，二つあることに気付く。「日本人」と「難民として自国の外へ出ていく必要のない国の国民」の二種類である。前者の日本人を想定した者は，必ずのように，日本による財政的援助を挙げる。少なくとも平和でより豊かな「日本」が援助するべきだと考える。ただし，日本が難民を受け入れるという発想は，ましてや，自分にも出来ることがあるとまでは思えないらしい。それもそのはず，日本の2015年の難民認定者は27人であり，申請者の99パーセントは却下されたのであり，日常生活で「難民」に遭遇する可能性は皆無なのである[注40]。

他方，無意識に，「難民として自国の外へ出ていく必要のない国の国民」を「私達」として想

定した学生は，無制限な受け入れは無理であると考える。欧州での難民に厳しくなっている傾向はある程度仕方がないと理解しているのである。「日本に難民を受け入れる」は想像に入らない，また，「欧州が難民を受け入れるのに制限がいる」という立場は，「私達は難民にはならない」ことが前提にあるから可能となる。しかし，絶対に難民の「彼等」になり得ないと感じる「我々」でも，一枚の「彼等の苦痛」を示す写真に簡単に衝撃を受け，そして往々にして同じくらい簡単に忘れる。そうした「我々」と，フェースブックのトリコロールカラーを重ねるプロフィール写真にも「こだわる」しかない，その「彼等」が世界に重層化した形で共に生きている。教育は，それに気付き，その気付きから，自分が本当には何が出来るかを問う力を養うことにあるのだろう。そのためにも，正しい知識を土台に，遠い「他者の苦痛」について考え，語る気持ちを持たせる必要がある。

6. 「他者の苦痛」に「近づく」と「同化する」の違い

「他者の苦痛」を眺める「我々」が彼等のその苦痛に「近づく」ことは，他者との完全な同化，まるで他者と距離がなくなり完全な同一化したような感覚，たとえそれが可能であるとしても，それから起こる同情を持つこととは異なるものでなければならない。そして，異文化コミュニケーション教育の求めるものが，幻想でしかない完全な同化のまやかしや一瞬で消え去るかもしれない同情の喚起であっては駄目なのである。同情ではなく，「他者の苦痛」に近づき，内的にいだくようになる真理を，多様な真理を持っているであろう他者と関わる過程を経て，ともに生きる世界を人間的なものに変えようとする段階に繋げていく可能性に開かれていないのでは意味がないからである。ハンナ・アーレントが『暗い時代の人間性について』(注41)で，レッシングの思想を解釈して，人間的である，人間性を持つ，ことに必要な「距離」の必要性を指摘しているように，他者との「距離」が限りなく「近く」なり，さらに「同情」することはあっても，「距離」自体が完全に消えることはない中で，共存していく必要があるのである。この「同情」と「距離」の関係について，アーレントの考えを解説したノルトマンが分かりやすく説明をしている―「同情」は「距離」，すなわち，「思索においてあらゆる他者の立場に身を置ける能力が展開し得る空間」，を破壊し，破壊されれば，多元性も破壊される(注42)。アーレントは，「人間的」であるのは，人間によって創造されたからでも，人間の声を聴いて人間的なものになるわけでもなく，「会話の対象」になって初めて，世界は人間的になると説明する(注43)。「私たちが世界の事物にどれだけ強く影響されたとしても，世界がいかに深く私たちを刺激し，興奮させたとしても，私たちが，私たちの同輩と共に世界について語り合わない限り，世界は私たちにとって人間的なものにならない(注44)」のである。私たちが人間であることを学ぶ，そうした語りは，多数の声が存在し，それぞれが「真理だと思っているもの」の表明が，人々を結合し，同時に分離するような作用が可能な空間，または「間」，相互間の「距離」と結びつくことになる(注45)。多数が一体となり，多様性を持つ人間の「間」のみで形成可能な世界が消えることは，むしろ非人間的なことに繋がるのである(注46)。

筆者の個人的体験を例にしてみたい。1980年代の米国留学中，大学院の友人であるテキサス出身のＩの実家に招かれて，クリスマス休暇の一ヶ月を過ごしたことがある。敷地内の門を車で入ってからも，その敷地はずっと続き，その同じ敷地内に一族の屋敷がお互いに車でいかなければならないような距離で点在し，一部には石油が出る箇所も，釣りもできる林に囲まれた池もあ

る，そんな場所だった。子ども時代に見た米国TVドラマ以上の快適なアメリカンライフを味あわせてもらい，大きなツリーの横で楽しそうに笑う自分の写真を今も大事に持っているのに，それでも長い月日を経て最初に思い出すのは，ある夜の会話なのである。広いリビングルームで，夜，皆でくつろいでテレビを見ていた時，アフリカでの飢餓の状態が映し出された。痩せこけた子ども達が弱って座っている，そんな映像ばかりが続く。突然，「私には，こんなに飢えている状態で，なぜこんなにも子どもを持つのか全く理解できないわ！」とＩの母親の声が響き渡った。父親がジョークを言い，それにあわせて母親の笑い声があがった。その会話に対する強烈な違和感，反発とともに，言いたいことがあるのに言えない，そんな強い焦燥感を感じた。「我々」と「彼等」の境界という点では，私も，テレビに映る「彼等」からすれば，テレビの前に座ったＩの母親の側，「我々」だったはずなのに，それでも，あの時テレビの前で，私は，Ｉの母親よりは，テレビに映し出される「彼等」にほんの少し近くにあると感じたのであろう。そして，あの瞬間，彼女との距離を認識もしたのであろう。この例が，もし他者の苦痛を，遠く離れた場で，映像を通して眺める「我々」に置き換えて考える時，「彼等に近くなる」ことができるような教育が必要とされると思われる理由を説明してくれるかもしれない。「近くなる」ことで，「彼等の苦痛」ときちんと向き合うことになるのかと問われれば，少なくとも，「向き合わないままでいる」可能性を少しでも排除することに繋がる，そう答えるしかない。「彼等」の地獄は，地獄であるがゆえに本当には他者は理解することはできないが，遠く離れた場から，「訳が分からない」と完全な無理解を晒して恥ずかしげもなく高らかに叫ぶだけの状態から，少しでも学生を「他者の苦痛」に近い位置に動かすこと―それはできるかもしれないのである。そして，その位置に動いたゆえに持つようになる「真理」を，世界をより人間的なものにするために他者と対話していく可能性も出てくる。

前述した，授業で使う唯一の，難民キャンプでのスーダンの兄弟の遠い場での「他者の苦痛」を明瞭に示す写真の例を引き続き使ってみたい。この写真は新聞記事(注47)とあわせて掲載された写真である。その記事では，写真を撮影したカメラマンの開催した写真展に展示されてある一枚であると伝えている。記事で，彼は，「他者の苦痛」を取った自分の写真は「ワインを飲みながら，友人達に見てほしくはないのです」と言う。記事のタイトルは，“Human nature seen through humane eye”「人道的な目で見える人間性」。「Humane eye」，すなわち，「人道的な」，「人道にかなった」，「人情のある」，「慈愛深い（他人･動物に対するあわれみの気持ち･思いやり･同情などを表す）」(注48)視線だけが可能にする眺め―それをカメラマンも写真を見る者に期待しており，記者もそれを汲んで記事のタイトルとしたのであろう。そして，それは，時には叶えられるのだ。この写真を前期セメスターのある授業で一回必ず示すことが何年も続いていたある日，授業もあと一回を残すだけとなっている，2011年７月９日に，南スーダン独立のニュースが流れた。20代半ばぐらいに見える青年が南スーダンの国旗を高らかに掲げ，群衆が喜びを爆発させて集っている写真をネットで見て保存し，前期の最後の授業日に教室のスクリーンに出して，授業で一緒に見た兄弟の写真が掲載された記事も，再度，そのスクリーンの右端に映し出して，この写真の兄弟の国である南スーダンの最新ニュースだと学生達には伝えた。そして，ふと「写真の中央の若者がこのお兄さんだったりして」と声に出してしまい，同時に，スクリーンに映し出されている記事の日付が2004年であることに気付き，「それはないか。７年ぐらいでは，こんなに大きくなってないよね。」とまた声にだしてつぶやいた。授業が終わって，パソコンを片付けている私のところに一人の学生がやってきた。「先生，この写真自体は，1998年に撮影と書い

てあるから，お兄さんであることもありますよね。」確かに，記事に掲載された写真の横の小さな字で記された説明には，1998年撮影と書いてある。彼女は，「彼等の苦痛」が撮影された，その年をきちんと確かめたのだ。そうしないではいられなかったのだ。そして，何よりも，私にそれを言わないではいられなかったのだ。「それはないか」とつぶやいてすませようとした，この私に，そして私のコメントに，である。あの難民キャンプを生き延び，そして今生きることの歓喜にあふれている，その青年でもあり得ますよ，あの痩せこけた兄弟は生存できたかもしれない，それはとても，とても大事なことなのですよ，と言いたかったのだ。あの日，彼女は，私より，この写真の兄弟の苦痛にずっと近いところに立っていたのである。私を恥じ入らせ，同時に胸を熱くさせた，この彼女の言葉が，異文化コミュニケーション教育の希望なのかもしれない。だからこそ，「我々」が「彼等の苦痛」に近づき，それゆえにもっと理解し語ることを求める気持ちを持たせることから教育は始めるしかない。彼等の苦痛を完全には理解し得ない，時には想像さえ本当にはできない「我々」を前提にした上で，知ることを求める気持ちをまず生み出させることに，より近づいた場に移動したために起きる「真理」を他者と語ろうと思わせることに，そして，その対話によって自分の生きる世界を人間的なものに変えていきたいと思わせるように，異文化コミュニケーション教育は希望とともに努力する責任があるのである。

おわりに

「シリア難民問題に関する最悪の７人」の中に，「首相や極右政党党首クラスの排外主義者と肩を並べて語られるにふさわしい差別扇動，排外主義に満ちたヘイトスピーチ」として選出されたのは，日本人のイラストレーターである[注49]。「安全に暮したい　清潔な暮らしを送りたい　美味しいものが食べたい　自由に遊びに行きたい　おしゃれがしたい　贅沢がしたい　何の苦労もなく　生きたいように生きていきたい　他人のお金で。そうだ　難民しよう！」と順に言葉を連ねていく彼女の一枚のイラストには二つの巧みな誘導がある。まず言語によって結論まで導く，その文章の詭弁である。「安全に暮したい」―まさに戦場と化し，命を守るために，その命の危険をおかして故郷を出てくるしかない人々の人間的な望みである。そして，当然ながら，人間は，清潔で，食べ物がある暮らしをしたいはずである。それが人間らしい暮らしを指すのだから。それを次々と，「美味しいもの」「自由に遊ぶ」「おしゃれ」と少しずつ，難民となる時に人々が理由とはしていない内容にすり替えていき，「何の苦労もなく」と続ける。そして「他人の金で」と「我々」，「我々の金」に結び付け，彼等の卑しい意図と行為を責めるのである。「難民はする」ものではなく，させられるものだから，苦痛なのである。「他者の苦痛」は，この言葉によって，ついに「我々」への災いに転じられる。そして，もう一つの誘導は，中央の少女のイラスト。まるで胸に一物あるような，攻撃的とも言える表情で，上目づかいに前を睨み付けている，この少女は，腕の所作にいたるまで，ふてぶてしく描かれる。本来「他者」である彼等は，「他人」，すなわち「我々」のものをあてにしており，その非言語は挑戦的で我々にはまるで「彼等」に不当に自分のものを奪われていく前触れのように危険なものにさえ見える。「彼等」が「人間的」に安全に暮す権利が，「我々」の同じような権利を奪うことでしか成り立たないのだという示唆となる。作者は，イラストの少女はシリア難民を意図したのではなかったが，シリア難民の少女の写真はトレースしたと認めている。ここでもまた，「他者の苦痛」を示す写真を人々は同じように見るわけでもなく，利用するわけでもないことが明らかになる。日本でのヘイトク

ライムのニュースが決して驚きではなくなった今，この他者の苦痛の状況を巧みに変換させる攻撃のメカニズムに気付き，激しく抵抗する，そこまでを異文化コミュニケーション教育が望むのは行き過ぎであると遠慮する余裕はないのかもしれない。

2016年８月，リオオリンピックでのアスリートの活躍を伝える明るいニュースが続く最中，血とほこりにまみれて放心状態で椅子に座っている５歳のシリア人の男の子の写真が，シリアの厳しい現実を伝えていて世界の多くの人の心を揺さぶっていると報道された[注50]。またもや「一枚の子どもの写真が世界に衝撃を」と話題になる。しかし，シリアの内戦はすでに５年も続いており，その悲惨さは世界に報道され続けてきたのだ。それは，欧州へのシリア難民の増加を伝える報道のずっと前からなのである。そして，１節に挙げた３歳のシリア難民のアイラン君の写真が世界的に衝撃を与えたと報道されたのはたった一年前のことである。長く続いている「他者の苦痛」に対して，衝撃と忘却という同じ応答のパターンをただ繰り返している事実こそ，まずこの「世界」は恥じ入り，そして語るべきなのだ。バトラーの言葉である，「わたしが自由に他者を破壊してはならない理由―そして実際，国家が最終的には互いを自由に破壊しあうわけにはいかない理由―とは，それがさらなる破壊的な結果へと続くからというだけはない。[注51]」は，それ自体は真実であるとしても，それ以上に真実があると彼女は続ける。「わたしという主体はわたしではない主体に結びついているということ，わたしたちはそれぞれ破壊し，破壊される力を持っているということ，そしてわたしたちは，この力とこのあやうさにおいて，互いに結びついている[注52]」。そして，この意味では，「わたしたちはすべて，あやうい生なのである。[注53]」

「グローバル化」という言葉が素晴らしい意味を内包するかのように使用されて巷に氾濫している。もし真の「グローバル化」なるものが存在すると言うのであれば，遠い場所の「彼等の苦痛」をも「我々の苦痛」とみなし，関わりあうしかない「あやうい生」を支えあって生きる行為そのものが，最終的には誰にも要求されるのだ。覚悟を持って，グローバル化した世界を生きるべきなのである。そのために貢献する異文化コミュニケーション教育の在り方において，特に，紙面の関係で今回取り上げることができなかった，写真以外のメディアでの表象と同一化の問題について，次稿で論じたいと考えている。

（注）

（１）青木　順子「異文化コミュニケーション教育（異文化教育）の原点としての『我々』と『彼等』のコミュニケーション問題（18）―異文化教育における「ジェノサイド」(3)―」安田女子大学紀要　No. 44, pp. 111-130, 2015.

（２）「溺死したシリア難民の男児の写真に衝撃」ウォール・ストリート・ジャーナル，2015年９月４日.

（３）「歴史を変えた，心揺さぶる子どもたちの写真」ナショナルジオグラフィック日本版，2015年９月８日.

（４）「難民問題，対IS……パリ同時テロが一週間でもたらたした変化」The Page，2015年11月24日，「“難民はもうたくさん…”パリ同時多発テロでEU内の難民政策に不協和音」NewsSphere 2015年11月16日，「パリ同時多発テロで周辺国に波及する排外主義。ドイツでも大規模な集会」ハーバービジネスオンライン，2015年11月22日.

（５）「プロフィール写真のフランス国旗化機能に『パリだけではない』の声も」ITmedia Facebook，2015年11月13日.

（６）「スウェーデン，最大８万人の難民申請者を国外退去へ」ＡＦＰ，2016年1月28日，「デンマーク，難民抑制法案を可決 財産没収など定め非難集中」ＡＦＰ，2016年１月27日，「亡命希望者の手首にバンド装着，いやがらせ誘発と物議 英国」AFP，2016年１月25日.

（７）「ドイツの難民施設に手榴弾投げ込まれる，極右の犯行」JNN，2016年１月30日，「スウェーデン“極右”覆面集団が子どもの難民を襲撃」ANN　2016年１月31日.

（８）「難民ら乗せた船転覆，子ども５人含む39人死亡　トルコ」朝日新聞デジタル　2016年１月30日.
（９）ソンタグ，スーザン　北條文緒（訳）『他者の苦痛のまなざし』みすず書房，2003年，p103.
（10）ソンタグ，p. 96.
（11）ソンタグ，pp. 100-101.
（12）ソンタグ，p. 12
（13）ソンタグ，p. 13
（14）ソンタグ，p. 116
（15）ソンタグ，p. 115
（16）ソンタグ，pp. 126-127
（17）Spiegelman, Art *The Complete MAUS (MAUS I・II)*, Pantheon Books, 1996. スピーゲルマン，アート　小野耕世（訳）『マウス』晶文社，1991年，スピーゲルマン，アート　小野耕世（訳）『マウスⅡ』晶文社，1994年，本稿では，引用する際には，『マウスⅠ』，『マウスⅡ』の頁を示している。
（18）他，日本版に記載された書評－「ドキュメンタリーのもつ細部の精確さと，小説の鮮やかなきりこみを併せもつ傑作だ。……まさに文学的事件である。」（ニューヨーク・タイムズ），「『マウス』は，マンガが映画や小説にまったくひけをとらないということを証明してしまった。偉大な功績だ」（レイモンド・ブリッグズ），「この作品が読者に与える影響は，カフカに匹敵する。」（デイヴィッド・リヴァイン）（スピーゲルマン，1991年，1994年）.
（19）他，英語版に記載された書評－「恐ろしいほど心を打つ芸術品」（ボストン・グローブ），「ちょうど核戦争のように，ホロコーストは想像できるものではない，その恐怖は芸術的想像を威圧するというのが決まり文句の一つにある。スピーゲルマンがその理論が正しくないことを証明したのだ。」（インディペンデント）」，「ナチスをネコ，ユダヤ人をネズミ，ポーランド人をブタ，そしてアメリカ人をイヌとして描いた。それらはみなぞっとするぐらい人間的なのだ。」（タイムズ），「感傷的なことに頼ることなく，作品が完璧で力強く感動させるから，それは私たちに働きかける。」（タイムアウト），「ホロコーストについて今まで語られた中で最も人を感動させる成功した物語」（ウォール・ストリート・ジャーナル）（Spiegelman，1996）日本語訳は著者による。
（20）小田耕世「マウスが巻き起こした大きな波紋」（スピーゲルマン，1994年）
（21）スピーゲルマン，1991，p. 100.
（22）スピーゲルマン，1994，p. 3.
（23）スピーゲルマン，1994，p. 134.
（24）スピーゲルマン，1994，p. 134.
（25）スピーゲルマン，1994，p. 136.
（26）Power Samantha *A Problem from Hell,* Harper Collins Publishers, 2002, pp.72-73.
（27）“The last shot depicted Anne in a concentration camp uniform swaying in the fog, but after the preview he cut the scene because he thought it was ‘too tough in audience impact. Instead, the film adopted the hopeful ending of the play, in which Anne declared, ‘In spite of everything, I still believe that people are really good at at heart.’”（Power, p. 73）
（28）“Anne actually went on to write in her diary: ‘I simply can't build up my hopes on a foundation consisting of confusion, misery, and death.’ But this was omitted, as it was far too somber a tone for Stevens or play director Garson Kanin, who said that he did not consider the infliction of depression on an audience ‘a legitimate theatrical end’.”（Power, p. 73）
（29）「『アンネの日記』映画化＝来月ベルリン映画祭で初演―独」時事ドットコム，2016年１月25日.
（30）「ベルリン国際映画祭，金熊賞に『火の海』難民問題を描く」朝日新聞デジタル，2016年２月21日，「審査員長の米女優メリル・ストリープさんは『我々の目の前にある問題について，映画が何ができるかを気づかせてくれる秀逸な作品』と評価した。」
（31）スピーゲルマン，1994年，p. 4.
（32）スピーゲルマン，1994年，p. 45.
（33）スピーゲルマン，1994年，pp. 45-46.
（34）バトラー，ジュディス　清水晶子（訳）『戦争の枠組み』筑摩書房，2012年，p. 127
（35）バトラー，p. 127.
（36）「溺死したシリア難民の男児の写真に衝撃」ウォール・ストリート・ジャーナル，2015年９月４日.
（37）ファーマー，ポール.「苦しみの多軸モデル」（『他者の苦しみへの責任』A. クライマン他，坂川雅子

（訳）みずず書房，2011年）pp. 69-101.
(38) ファーマー，p. 87.
(39) ファーマー，pp. 92-93.
(40)「日本の昨年の難民認定者27人，99％以上却下」ＡＦＰ　2016年１月23日.
(41) アーレント，ハンナ　仲正昌樹（訳）『暗い時代の人間性について』情況出版，2002年.
(42) ノルトマン，インゲボルグ 「解説：自由が問題である」p. 11.（アーレント，ハンナ『暗い時代の人間性について』）
(43) アーレント，pp. 48-49.
(44) アーレント，pp. 48-49.
(45) アーレント，p. 61.
(46) アーレント，p. 61.
(47) “Human nature seen through humane eye,” *The Daily Yomiuri,* 2004, 5. 20.
(48)「新英和中辞典」研究社，2003年.
(49) “Right-wing Japanese artist Toshiko Hasumi seems to think Syrian children are choosing to be refugees for all the benefits it provides. Say what? The caption with this cartoon reads, “I want to live a safe and clean life, eat gourmet food, go out, wear pretty things, and live a luxurious life… all at the expense of someone else. I have an idea. I'll become a refugee,” according to the BBC. Although the artist argued she didn't specifically label the girl as Syrian, she admits to have modeling the image after a photo of refugee child living in Lebanon. Clarifying her position further, Hasumi claimed she was only attacking “fake refugees”. Apparently she believes some people are just fleeing bombed out homes, bullets and dead family members for kicks and giggles.（“ 7 of the worst reactions to the Syrian refugee crisis” stepFeed October 12th, 2015），「難民侮辱イラストを描いた漫画家はすみとしこ『シリア難民問題に関する最悪の７人』に選出される」BUZZAP! 2015年10月14日.
(50)「シリア空爆で流血の５歳男児映像，SNSで動揺と非難広がる」（Goo ニュース，2016年８月19日）“Syrian boy in ambulance reminds world of war's horror”（NBC, Aug. 19, 2016）
(51) バトラー，p. 60.
(52) バトラー，p. 60.
(53) バトラー，p. 60.

〔2016.　9.　29　受理〕

コントリビュータ：青木　克仁　教授（生活デザイン学科）